

「現代日本の掛軸展」

- ・ 主 催：北井画廊
- ・ 会 場：在アルゼンチン日本大使館広報文化センター

「ARTECLASICA 2012」(アルテクラシカ 2012)

- ・ 主 催：THE PICTORIAL BARDON GROUP
- ・ 会 場：Costa Salguero Convention Center, Buenos Aires, Argentina
- ・ 画廊数：43 画廊
- ・ 国 数：5 カ国 (アルゼンチン、ペルー、オーストラリア、アメリカ、日本)

4月20日の夕刻に成田空港を発ち、ニューヨークで乗継ぎ、4月21日の朝にブエノスアイレスのエセイサ国際空港に到着した。時差は日本時間より丁度12時間遅く、日本時間では21日の夜頃となる。

無事に通関を終え戸外へ、秋晴れのブエノスアイレスは少し肌寒く、コートを脱ぐには至らなかった。大荷物をレミース（ハイヤー）に積み込み、一路、宿へ向かう。

4月23日午前9時半、「現代日本の掛軸展」会場の在アルゼンチン日本大使館広報文化センターへ作品搬入後、展示作業を開始、午後4時頃に完了する。大使館職員の方々は終始協力的で大変有り難かった。会場内に各作家作品の解説書ファイルを置き、作品に集中してもらうべく敢えてキャプション等は作品の傍に掲示せず作品のみを展示した。

4月24日午後3時、大使館の方が手配下さったコクテル（レセプションパーティー）業者が飲食物の準備を開始、少しずつ来場者があり午後5時過頃には多くの方々がお越し下さった。事前のプレスリリースにより現地唯一の邦字紙「らぶらた報知」や「ALTERNATIVANIKKEI」（月刊誌）に記事掲載されたこと、また大使館職員の方が広く関係機関に本展ポスターや案内状を配布下さったことも幸いした。「らぶらた報知」高木一臣編集長もお越しになり、本展開催を喜んで下さり、「こういう作品は初めて見る」と展示作品1点1点をじっくりと堪能されていた。ひとしきり歓談の後、アルテクラシカのディレクターAndres Bardon 夫妻が来られたところで、大使館職員の方に通訳をお願いして本展の主旨や掛軸、床の間、日本の機能美について小生より皆様へ話し、巡回するアルテクラシカへの招待状を配り、閉会となった。

広報文化センター2階は図書館となっており常時来館者がある。また活け花教室等も同会場脇で行われ、地下の劇場では定期的に日本の映画やドキュメンタリーフィルムが上映されており、27日の最終日迄、いろいろな方々に作品を披露することができた。またアルテクラシカへ全作品が巡回する旨をスペイン語で記した掲示板と招待状を多数置き、アルテクラシカへと人々を誘った。

広報文化センターの佐藤所長をはじめ職員の方々、多くの来場者の方々よりレベルの高い作品展の開催と喜んでもらい、成功裏に終了することができた。

5月3日午前7時、アルテクラシカ会場のコスタ・サルグェロ・コンベンションセンターのパビリオン5へ作品搬入後、展示作業を開始、午後2時頃に完了する。午後7時からのレセプションに備え、一度宿に戻り再度会場へ。

アルテクラシカ主催者より各画廊ブースの机の上にワインとフィンガーフードが並べられ、夜8時頃にはたくさんの着飾った来場者達で賑わい、我々のブースにも多くの人々が訪れた。見慣れない掛軸作品についての質問や価格を尋ねられて対応に追われた。午後11時を過ぎたところで閉会のアナウンスがあり終わらない人々もようやく帰途につきはじめた。

5月4日からの4日間は午後2時から9時迄開催、特に夕方以降は混雑を見せた。日本の現代的な掛軸作品へ注目を促す会場アナウンスが何度か流れ、主催者の我々の作品への評価と好意を感じた。

意外にもブエノスアイレスでは墨絵が盛んで多くのアルゼンチン人の墨絵作家が存在する。広報文化センターでも我々の後にアルゼンチン人墨絵作家の個展が開催されていた。また俳句も盛んで、墨絵に俳句を添えてみせるやり方が一般化している。ただ、広報文化センターの方の話しによると、どちらもある一定のレベルまでは至るものの、それ以上の発展は難しく、日本から高レベルの作家による啓蒙を期待されていた。今回のようなアートフェアで作品頒布といった営利性の強い企画ではなく、現地の美術館や公的な非営利企画であれば国際交流基金という日本の助成制度を利用できる可能性があり、その際には作家の渡航費を得ることができ、国が認めた企画として現地大使館も今回以上の全面的なバックアップをすることができると助言をいただいた。

アルゼンチンは広大で芳醇な大地に、人口の3倍いるという牛や、世界的に人気のワイン、その他の農作物の生産国として食料自給率も高く、非常に豊かな国ではあるが、2001年に国の経済が破綻して中間層が謳歌した時代が去り、

現在は貧富の差が拡大しつつある。また現地の情報では一時は安定感を取り戻していた現地通貨ペソの価値が最近になって再度不安定になりはじめ、米ドルや欧州通貨ユーロ他、価値の比較的安定している物品に交換しようとする動きが増し、ペソでの購買性は高まっているとのことでした。確かに会場でも隣ブースの現地画廊は勿論ペソ決済で10作品売却しホクホクとしていた。我々も作品価格をペソで伝えた際には商談が進むケースは多かったが、高額のペソを米ドルやユーロに両替することは現状困難な為、最終的に支払を米ドルかユーロでお願いすると殆どが上手くいかず、またペソ決済したとしてもアルゼンチン内で消化する必要があり非常に難しい判断を迫られた。一方、オーストラリアから参加していた画廊も同じ悩みを持ちながらも20号程の作品を4500米ドルで売却したとの吉報に一脈の望みを持ち、最後迄諦めずに商談に臨んだが、残念ながら無頒布に終わってしまった。

前回2009年にこのアルテクラシカに初参加し、欧米で好く頒布されている作家作品群に現地のマスメディアも大きく取り上げ、高評価を得つつも無頒布に終わった経験から、今回は指向を少し変えて現代的な作品で、かつ「掛軸」という現地であまり見慣れない東洋性と、現地広報文化センターでのプレイベントで話題性を加味し、また価格帯もある程度抑えて臨んだが、今回も無頒布の牙城を崩すことは出来なかった。同じ南米でもオリンピックとサッカーワールドカップ開催で好景気といわれるお隣のブラジルとは大きな違いがあるのかもしれない。ブエノスアイレスには他にも複数のアートフェアが存在するが、日本から参加する画廊は希有である。ましてやブエノスアイレスの画廊街を歩き、いくつかの画廊と接触を持ったが、皆一様に「なぜブエノスアイレスに？」と聞かれるほどで、この弊廊の行為自体を誰しもが疑問に思うのである。

昨今の世界的不況の中も、多くの作家や画廊が欧米中心の美術市場で切磋琢磨を繰り返している。欧米には長い歴史と確立された大きな美術市場があり、世界中の作家と画廊がそこでの成果を得るべく日夜精進している。日本からは最近特に香港をはじめアジア市場へ進出する作家や画廊が増えて来ている。

そういった中で南米は未だ未開で、その意義や位置、難しさから敬遠されているのかもしれないが、我々のような市場の主流にいない者には、そこに何かしらの大きな可能性が秘められているのではないかと願い、こうした行為に至ることはある意味、必然と言える。

今回2度目のブエノスアイレス進出で、現地での認知度は更に上がったこと

は確かで、今後どのようにつなげてゆくかが大きな課題である。